

第5章 夏の地区大会決勝戦

とうとう地区予選大会決勝の日をむかえた。決勝は二年連続で墨谷二中对青葉学院の対戦となった。

5・1 選手控え室で…

丸井「試合まえてのはなんと経験しても緊張しちゃうもんだな。」

高木「そうですね。」

丸井「おい、着がえたら腹ごしらえしようぜ。」

高木「はいっ。」

食事が始まったが、丸井がいつも大食いの近藤がやけに小さな弁当箱で食べているのに気がついた。

丸井「近藤！ おおぐらいのおまえがそんなかわいい弁当でまにあうのかよ？」

近藤「試合まえやから、かるうにときってママにいわれたんや。」

丸井「ママ？」

「ブーツ」

ナイン一斉に腹をかかえて笑いだした。

丸井「あの顔でママだと。」

近藤「ママをママいうて、なにがおかしいんやねん…？」

島田「くるひいっ。」

イガラシ「よしなさいよ。あまりからかうと試合に影響しますよ。」

丸井「あ…すまん、すまん。いや…そこまで気をくばるなんて、たいへんいい心がけだ！ ん。」

みんな横目で近藤を見て笑いをこらえていた。

イガラシ「ブーツ！」

近藤「イ…、イガラシさんまで…。」

丸井「このやろーっ、人のこといつときながら。」

わきあいあいで食事をしているところに青葉部長を先頭に青葉ナインが入ってきた。

丸井「や…どうも、しばらく。」

青葉部長「なかなか楽しそうな昼食じゃないか。ほほーっ、めざしか、おいしそうだね。」

丸井「あ…気がつきませんで。おひとつどうぞ。」

青葉部長「いや…、いますませてきたばかりなんでね。」

丸井「あ…そう。」

青葉部長「おいしいからって、試合まえだしほどほどにね。」

丸井「それもそうだな。このへんでやめとくか。しかし、あいてのチームまで注意するなんて、さすが余裕あねね！ みんなほどほどにしようぜ。」

イガラシ「そうスね。」

青葉学院は更衣室のおくから墨谷二中を横目で見ながら着がえを始めた。

佐野「しかし、昨年の墨谷にくらべるといやにおちついてますね。」

青葉部長「うむ…、かえっておまえたちのほう緊張しているぐらいだ。」

佐野「やつぱり、昨年、今年と大試合にでますからなれてきたんですね。」

青葉部長「いや…そうじゃあるまい。」

佐野「そうじゃないといえますと…？」

青葉部長「自信だよ、自信。あれはどうみたってうちに負けるとはおもっていない顔つきだな。まあその余裕もいまのうちだろうが…。」

青葉部長は墨谷の食事風景から墨谷の自信を読みとったが、春の全国選抜大会を制した青葉もまた墨谷には負けない自信を持っていた。

5・2 試合開始

試合まえのあいさつが終わって、墨谷ナインは守備位置についた。墨谷二中のピッチャーは近藤。試合前のウォーミングアップの投球練習をはじめていた。

佐野「あれで、さわぐほどのタマかね。」

青葉捕手「まったく。」

佐野「一番、ちよっとおどろかせてやれ。」

中村「まかせといて。」

「プレイボール」

球審の合図で試合がはじまった。近藤の初球はストライク。墨谷応援団から歓声が上がった。

「ナイスピッチ」

「いいぞ近藤！」

近藤「すごい歓声やなあ！ しびれるーっ。」

決勝戦ということもあって盛り上がる球場に近藤はやや戸惑いながらも二球目を投じた。

「ストライクツー」

近藤「こいつでどうやっ。」

「カーン」

近藤の三球目先頭打者レフト中村はライト前にヒットを打った。こんどは青葉応援団から歓声が上がった。

「やったーっ」

青葉部長「ようし、それでいい、それでいい。さあ二番もつづけ！」

藤田「はいっ。」

「タイム！」

丸井がタイムを取ってマウンドに向かった。

丸井「なあ近藤。まさか三球ともどまん中に投げたんじゃあるめえな。」

近藤「い…いえ、その…えーと…。」

丸井「おれはおめえの後ろにいるんだ。なにかもわかってるんだぞ。」

近藤「す…すんまへん。ス…ストライクがはいると観衆がワーツとわくもんやから…。」

丸井「で…それにこたえてやろうと投げたわけか。」

近藤「ハハ…そうなんす。」

丸井「バロー、てめえはプロ野球のスターじゃねえんだぞ。まわりなんか気にしねえで、ちゃんとコーナーについて投げるんだ。」

近藤「はい。」

近藤は気を取り直し、コーナーに投げることに気をつけて二番バッター藤田に向かって投げた。藤田は近藤の投げた二球目をおもいつきバットを振った。

「カーン」

快音を残して打球はレフトスタンドに向かってとんでいった。レフト久保が追いかけるも、打球ははるか上を越えてスタンドに吸い込まれていった。ツーランホームランとなって、青葉学院が先制した。

マウンドに墨谷内野陣が集まった。

丸井「おいおい、気をおとすのははやすぎるぞ。まだ負けたわけじゃあるまいし。」

イガラシ「どうしたんだよ、近藤らしくもない！」

近藤「だってコースをついたワイのタマが打たれたとおもうと…。」

丸井「このやろう、のぼせあがるのもほどほどにしやがれ。いまおまえが投げているあいでは青葉なんだ、青葉！」

イガラシ「まあ、まあ。なあ近藤、いま打たれたタマはすこし内側にはいつてたんじゃねえのか？」

近藤「そ…そういわれると、ほんのちよつと。」

イガラシ「そのほんのちよつとのわずかなミスをみのがさないのが青葉なんだよ。よくするにやつらを打ちとるのには速球だけじゃなく、コースをつく正確さが必要なんだ。」

近藤「は…はあ。」

イガラシ「おまえのコントロールならできるはずだ。やってみろ。」

近藤「は…はい。」

近藤は三番打者をなんとかサードゴロに打ちとった。

イガラシ「近藤、まだコースがあまいぞっ！」

近藤「は…はあ。」

近藤はコースに気をつけて四番打者に向かって投げた。

「ストライク」

丸井「いいぞ近藤！」

イガラシ「その調子だ。」

内野陣が近藤に声をかけた。近藤は二球目をバッターに投げ込んだ。

「カーン」

セカンド後方に上がる小フライとなりセカンド丸井が後ろ向きで捕球した。しかし近藤はなぜ今のボールが打たれたのかよくわからないでいた。

イガラシ「どうかしたのか、近藤。」

近藤「いまのバッターいうたらコースをバッチリついたので打ちはるもんで。」

イガラシ「な…なんでえ、あいてが青葉の四番ならあたりまえだ。」

五番はショート中野。ツーストライクからの三球目を打ってキャッチャーフライとなった。ようやくチェンジとなり青葉学院の一回表の攻撃が終わった。墨谷ナインがベンチに戻っていく。

丸井「どうしたんだよ、近藤。」

近藤「だって、ひとりも三…、いや…なんでもないねん。ハハハ…。」

丸井に怒られるのを察知して近藤は言葉を濁してベンチに戻った。

近藤「しかし一イニングでひとりも三振にできなかったのはうまれてはじめてや。青葉ってやーらしいチームやなあ。」

近藤は青葉ベンチを見ながら青葉学院の強さを感じていた。
一方青葉学院ベンチでは…

青葉二塁「あのやろう、おもったよりたちなおりがはやかっただな。」

青葉捕手「む。しかしあのぐらいやってもらわなくちゃ試合がだらけちゃうぜ。」

佐野「まあなんにしても二点いれてもらえりゃたくさんだ。」

青葉捕手「それもそうだな、佐野から打てっこねえからな。」

佐野「さあ、いこう。」

5・3 青葉の動揺

青葉のエース佐野が投球練習をはじめた。

島田「昨年よりいちだんとはよいな。」

加藤「う…うむ。」

墨谷二中先頭バッターはショート高木。太いバットを短く持って打席に入った。

加藤「あせるな、あせるな。」

丸井「じっくり打っていこうよ!」

ベンチから先頭バッター高木に向かって声がとんだ。

佐野「余裕あるふりをしやがって、おれのこのタマをさわれるものならさわってみろ。」

「カーン」

高木は佐野の三球目をセンター前にはじき返した。

青葉部長「そ…そんなバカな。あの佐野のタマが打たれるなんて…。」

青葉ベンチは動揺した。

丸井「さあなにもえんりよすることあねえガンガン打っていこうぜ。」

加藤「オウッ!」

二番ファースト加藤は佐野の初球を引っぱりライト前に運んだ。

三番丸井もヒットを打った。四番イガラシも、そして五番小室、六番島田となんと佐野に対して六連続ヒットを打った。三点はいつて3対2と逆転し、まだノーアウト満塁のチャンスが続いた。

たまらず青葉ベンチから「タイム!」の声がかかり、青葉部長がバッテリーを呼び寄せた。

青葉部長「おまえら気はたしかなのか?」

佐野「は…はあ?」

青葉部長「やつらがバットをみじかくもってるのはなんのためだ?」

青葉捕手「佐野の速球についてくるためだと思います。」

青葉部長「だったら長くもたせるようにしてやればいいだろう。」

青葉捕手「は…はあ…?」

青葉部長「外角低めいっばいについてな!」

佐野「なるほど。」

青葉捕手「ああバットをみじかくもってりゃ外角は手がでませんからね。」

青葉部長「やっと冷静になってきたな! 連打されたぐらいで動転しちゃだめだぞ。」

佐野「す…すいません。」

青葉部長「さあ、いってこい!」

「プレイボール」

丸井「さあバッター、えんりょなくいこうぜっ。」
久保「よしきた。」

七番久保は初球外角低めのボールを空振りしたが、二球目うまくおっつけてライトに運んだ。もう少しで抜けるかという当たりだったが、青葉右翼がこのタマを捕球しサードランナーイガラシがタッチアップして得点を加えた。

「タイム！」

青葉部長がもう一度バッテリーをベンチに呼んだ。

丸井「へへ：青葉にタイムがおおくなってきたぞ。」
加藤「まさか、こう苦戦するとはおもわなかったんだろうよ。」

青葉部長「これじゃ手のうちようがないな。いまや佐野でおさえられるようなチームじゃなさそうだ。こうなったらバックにまかせるんだ。やつらにへたなさいくは通用せんからな。」

佐野「わかりました。」

青葉部長「さあ、気をぬくなよ！」

青葉捕手「はいっ。」

ワンアウトで、一塁三塁。青葉のピンチは続いた。

続く八番遠藤は佐野の初球をジャストミートするがおしくもファールとなった。二球目ライトの頭上をぬくかというあたりだったが青葉右翼がナイスキャッチ。一塁ランナー島田がとびだしていたためダブルプレーとなった。

一回の攻防を終わって墨谷二中が4対2と青葉学院をリードした。

5・4 近藤の自信

この回の青葉学院の攻撃は六番からであった。トップバッターが近藤のタマを右中間にはこんだ。そして次の七番バッターがすかさずバントした。サードイガラシがすばやく前進してファーストに送球した。

「アウト！」

近藤「ハレ…、あないすばやくバントを処理したのに：セカンドでころせないなんて…。」

イガラシ「青葉ってのはあれぐらいの足はザラなんだよ。かきまわされないようにしろよ。」

近藤「は、はあ。」

ワンアウト二塁。次の青葉八番バッターはサード横を抜けるかというあたりだったがイガラシがこれを横っ飛びでとった、しかしどこにもなげられずワンアウト一塁三塁とピンチがひろがった。

丸井「どうした、近藤？」

近藤「こう打たれればなしやとワイかて自信なくなってしまうがな…。」

丸井「なにも自信なくすこたあねえんだよ。そもそもおまえだけでおさえられるあいてじゃないんだから。元氣だして投げんだぞ。」

丸井はセカンドからマウンドに行って近藤に声をかけるとまたセカンドに戻っていった。

近藤「よけい自信なくすことをいうんやから、もう…。」

バッターボックスにはピッチャーなので九番にいるが、強打者佐野が入った。近藤は試合前にこのバッターは一発があるから注意するようにイガラシから忠告を受けたことを思い出していた。

近藤「ええい、どうにでもなれ。」

自分のタマがごとく青葉にミートされるので自信がなくなっていた近藤だったが、とにかく自分のピッチングを一所懸命にやることだけを考えて投げ込んだ。

「カキーン！」

左打者佐野は近藤のタマをうまくおつつけてレフト方向に流し打った。サードイガラシが頭上を抜けるかという打球をタイミングよくジャンプしこれを捕った。走ろうとしていたサードランナーがベースに返ろうとしたその時、ショート高木がサードベースにカバーにすばやく入りイガラシからのタマを捕球した。

ダブルプレーとなり、この回墨谷は青葉の攻撃を0点におさえた。まだ二回を終わったばかりだというのに、肩で呼吸をしてベンチに戻ろうとしている近藤にイガラシが声をかけた。

近藤「はあ…、はあ…。」

イガラシ「どうだ、つかれたろ。」

近藤「つかれたもなにも、もうひと試合投げたみたいや。」

イガラシ「青葉が相手じゃむりもねえさ。でもがんばるんだぞ、あの佐野にしたって同じなんだから。」

近藤「はあ。」



そして回はすすんだ。青葉はたたみこむような墨谷の猛打線をあいてに、佐野のたくみなピッチングと、目のさめるような好プレイでかろうじて追加点をゆるさなかった。いっぽう墨谷も近藤のけんめいなピッチングとナインのみごとなプレイでおなじく得点をゆるさなかった。そして一進一退の目のはなせぬすさまじい試合展開で九回をむかえたのであった。

5・5 ピッチャーイガラシ

九回の表、得点は4対2で墨谷二中がリードしていた。そして青葉学院の最後の攻撃をむかえた。

佐野「あいかわらずはやいタマですね。」

青葉部長「しかし、おまえらなら打ちくずせるピッチャーのはずだ。絶対にウチが勝てるはずなんだ。」

「カキーン」

この回先頭の二番打者藤田がライトに二塁打を打った。

イガラシ「どうした、近藤！」

近藤「どうしたって…?」

イガラシ「いまのタマまるで球威がなかったじゃねえか。」

近藤「あ…い、いまのちよつとすっぱぬけてしもたんや。」

イガラシ「まあいいだろ、どうせ二点リードしてんだ。一点やるつもりで投げろ。」

青葉部長「よしよし、これでばんかいのおぜんだてがそろったようだな。」

近藤には余裕がなくなっていた。ランナーがいることを忘れて、セツトポジションをとらずに次の打者に投げこんでしまった。セカンドのランナー藤田はらくらく三塁に進んだ。

丸井「バ…バカヤロ。どうしたんだ！」

近藤「あ…ランナーわすれてた。」

丸井「しっかりしろよ、おい。」

青葉部長「さて、たたみこめる足がかりができたぞ。」

ランナーが三塁に進んだこともあって近藤は大きく振りかぶって投げようとしていた。それを見たサードランナーはスタートをきった。サードイガラシも…。バッターはあらかじめ決められていたようなサインプレーでバントした。しかしこのタマがピッチャー前に上がる小フライとなってしまった。あわててサードランナーがベースに戻った。

近藤「オーライ、オーライ」

近藤がこのフライをとろうとするが、落ちてくるタマの前で転んでしまった。イガラシがあわててバックアップした。

丸井「な…なにやってんだ近藤！」

近藤「すいまへん、ちよつと足がもつれてしもて…」

丸井「イガラシおまえがしめくくってくれよ。」

イガラシ「はい。」

近藤「そ…そんなせっかくここまで投げたんや、さいごまで投げさせてえな。」

丸井「だめだ、だめだ。投げさせてやりたいのはやまやまだが、ここでもたへま

がでりや逆転されちまうからな。」

近藤「そんな殺^{せつしょう}生な、もう絶対にへませえへんから。」

丸井「しつこいな、おまえは。だいたいその息づかいはなんだ。つかれきっているじゃねえか。」

肩で呼吸をしている近藤を丸井が指摘したとたん、近藤は突然にシャキツとした。

丸井「どうする、イガラシ。」

イガラシ「二点リードしてることだし、もうすこしようすをみてやったらどうでしょう。」

丸井「まあいいだろ！」

近藤「おおきに、おおきに。」

丸井「ただしへまをしたらすぐ交代だかな。」

近藤「は、どのようにでも。」

丸井は完投したがる近藤を少し見直して、続投を決意した。そして青葉のバッターは四番、近藤の初球をフルスイングした。

「カーン」

打球は快音を残してセンター上段に吸い込まれていった。

丸井「しょうがねえさ、打たれちまったんだからな。さ、たてよ。」

丸井はマウンドですわりこんでいた近藤の肩に手をかけた。

丸井「イガラシ、ちよ、ちよつとさわってみろ。すごく熱もってるぞ。」

イガラシ「こ…近藤！ おまえ肩をさわられていたくないのか！」

近藤「いえ…べつに。」

イガラシ「じゃあ、いたさをとおりこしたんだな。」

近藤「どういえは、三、四回ごろいたかったけど…、どうして？」

丸井「いったい、どうしたってんだい。」

イガラシ「ちよつとキャプテン！」

イガラシは近藤に聞こえないようにマウンドから離れたところで丸井と話をした。

丸井「どうかしたのか？」

イガラシ「いぜんおれが青葉戦で肩をぶっこわしたときとおなじなんですね。」

丸井「ええ……。」

イガラシ「やつのからだではないみたいだした三、四回が限界だったんですよ。からだはでかいがなんたってまだ一年生なんですからね。」

丸井「あ……あのバカヤロウなんだってだまってやがったんだ。」

イガラシ「シー、シーッ。いましらせちゃかわいそうですよ。シヨックが強すぎますからね！ またなおつておれみたいに投げられるようになるかもしれないんだから。」

丸井とイガラシは再びマウンドにやってきた。

丸井「さあベンチでやすんでろ。これいじょう点をとられちゃかなわねえからな。」

近藤「べ…、ベンチ？ ワイがピッチャーおりるときはライトにはいるんやなかったんですか。」

丸井「バ…バカヤロウ。おまえみたいなへマはベンチにひっこんでりゃいいんだ。」

近藤「そ…そんなー。」

丸井「はやくひっこまねえかい。」

近藤「あいた。いたいなあ、もうー。」

丸井が近藤のケツをけりあげてはやくベンチに行くように指示した。マウンドにはイガラシが立った。そして投球練習を開始した。

イガラシ「よくみてるんだぞ近藤！ かならず勝って、全国大会行きをきめてやるぞつ。そこでおまえといっしょに投げるんだ！ 優勝するためにな！」

リリーフに立ったイガラシの気迫はすさまじかった。青葉打線はイガラシの投球になすすべなくアウトをかさねていった。そして青葉のリードを最小の一点におさえたまま、墨谷二中の最後の攻撃をむかえた。

5・6 佐野降板！

墨谷ナインは最後の攻撃の前にベンチ前で円陣を組み、キャプテン丸井の注意を聞いていた。

丸井「さあなんとしてもばんかいしてやるんだ。ここで負けたらおれたちの全国

大会優勝の夢も水のあわになっちゃうんだからな。いけつ、一番バッター！」

島田「キャプテンからですよ。」

丸井「あ……。」

小室「あんなにこうふんしちやっただいじょうぶかな。」

ピッチャー佐野が丸井に対して投じたタマはストライク。しかし丸井は佐野の投げたタマに球威がないことを感じとった。丸井がマウンドの佐野をみると、佐野は肩で大きく息をして疲れを隠せないでいた。佐野の投げた二球目、丸井は強振した。しかし力んだためバットに当たりそこねてファーストゴロとなってしまった。

丸井「し…しまった。」

ファーストが前進してこのボールを取って、ベースカバーに入った佐野に投げようとしたその時だった。佐野が倒れ込んでしまったのである。

「タイム！」

青葉からタイムの声がかかり、青葉部長が佐野のもとにむかった。



青葉部長「さ…佐野！ 佐野！」

佐野「あ、すみません。」

青葉部長「ピッチャー交代！」

佐野「ま…まってくください部長！ ぼくまだ投げられます。」

青葉部長「いいんだ、いいんだ、よくやった。さあベンチにかえって休むんだ。」

佐野「ぶ…部長、おねがいです。あとひとり…いや…一球だけでも投げさせてください。」

青葉部長「バカなことをいうな、ここでムリをすればどうなるかおまえ自身がいちばんよくしってるはずだ！」

佐野「し…しかし部長…」

青葉学院のエースでもあり、キャプテンでもある佐野は必死で続投を志願したが、再び倒れ込んでしまった。

青葉部長「さ…佐野！ タ…タンカだ。タンカをもってくるんだ！」

佐野はベンチに下がり、変わりにピッチャーには次期エース候補とされている大橋がマウンドに立って投球練習をはじめた。

高木「けっこう、はやいな。」

加藤「さすが青葉のリリーフとなるとちがうぜ。たのむぞイガラシ！」

イガラシ「よかったです。」

「カーン！」

イガラシはリリーフ大橋の二球目を打った。イガラシの打球は右中間をやぶる二塁打となった。ノーアウト二塁三塁。

五番小室がバッターボックスに入った。ここで墨谷二中は初球をスクイズをした。しかしスクイズしたタマは三塁線をわずかにこえ、ファールボールとなってしまった。

「タイム！」

青葉学院の部長が内野陣をベンチ前に集めた。

青葉部長「いったいどうしたんだというんだ、おまえたちは。スクイズをけいかいして一球はずせといったサインがみえなかったのか。」

青葉捕手「あ、う…うっかりしてました。」

青葉部長「いいか、こういうときこそおちつくんだ、こういうときこそな。」

青葉捕手「は…はい。」

小室は次のタマをスクイズのかまえからヒッティングした。打球はレフトフライとなり三塁ランナー丸井がタッチアップした。青葉レフトがとったタマをバックホームした。

「セーフ！」

「同点だあーっ！」

レフトが直接バックホームしたためセカンドイガラシは三塁に進塁した。六番島田は三塁線を強襲するライナーを打つが、青葉サードもこれをダイレクトでキャッチした。サードイガラシがとびだしていたためダブルプレイとなった。

高木「くそっ、あと一歩つてところで勝ったのに。」

丸井「ようし、こうなったら延長でもぎとるしかねえな。がっちりこうぜ」

延長にはいってイガラシはたくみなピッチングで青葉の猛打線にたちむかった。ナインたちもそれにこたえるようによく守り、青葉に得点をゆるさなかった。いっぽう青葉も火を吹くような墨谷打線を好リリーフと完べきな守備と、それに選手層のあつい利をいかし、意表をつくたくみなリリーフの交代でやはり墨谷に得点をゆるさなかったのであった。

5・7 すて身の青葉

回をおうごとに墨谷は選手層のうすさをかくせなかった。ついにはだれの目にもその変化がわかるようになったのであった。そして回は十七回にはいった。

この回の青葉学院の先頭打者ショート中野は右中間を破るツーベースヒットを打った。

青葉捕手「ようし、ついにノーアウトでランナーが得点圏にはいったぞ。」

中村「そろそろ勝負をつけなくちゃあな。」

青葉部長「なにをのんきなことをいっとるんだきさまら！もうとつくに勝負がついてあたりまえなんだぞ。それをぐずぐずしおって。ピッチャーのイガラシをみろ！ただつたつたつてただけだつてのに。さ、こんどこそこのチャンスをもににするんだぞ。」

青葉左翼「は…はいっ。ようし…。」

イガラシの疲労はとつくにピークを越えていた。それでもイガラシは投げ続けた。

イガラシ「あっ。」

青葉左翼「おーいて。」

イガラシ「す…すみません。」

イガラシの投げたタマは打者の背中を直撃するデッドボールとなってしまった。

丸井「タイム！だいじょうぶかよ、イガラシ。」

イガラシ「へへ…ちよつと手がすべっちゃって。」

丸井「こうなったら、バックにまかせて打たせていけよ。」

イガラシ「ええ…でもバックつたつてあれでだいじょうぶなんすかね？」

丸井「あれでも、おめえよりはましだ。」

イガラシ「そうすかね、へへ…。」

丸井「ま…なんにしてもがんばれや。」

イガラシ「はい。」

「プレイボール！」

続く青葉学院のバッターはイガラシのタマをセンターに運んだ。センター遠藤が前進してきてダイレクトで取ろうとしたが、足がもつれて転倒してしまった。ライト島田がバックアップした。セカンドランナーの中野はこれを見て、サードベースをまわり一気にホームに突っ込んだ。島田の投げたタマをイガラシがカットし、キャッチャー小室に投げ込んだ。ホームベース上でのクロスプレーとなり、中野と小室がぶつかりあつてかろうじてアウトになった。しかし中野が立ち上がれない。

主審「ちよつとだれか。」

青葉部長「ど…どうした。」

主審「肩をはずしたようですね。」

青葉部長「タンカもつてこいっ。」

青葉部長の指示で青葉ベンチからタンカが運ばれた。

中野「いたたたた…。」

青葉部長「そ…そうつとはこべ。」

中野は青葉ベンチに寝かされた。

青葉捕手「部長、こう負傷者がでちゃ、この試合に勝つてもかんじんの全国大会でだいじょうぶでしようかね。」

青葉部長「おまえたち、ほんとうにそんな心配してんのか。」

中村「は、はあ…。」

青葉部長「あんなくたびれた墨谷からどうりで得点できないはずだ。なあおまえたち、墨谷のキャッチャーのスパイクだらけの傷をみろ！それにピッチャーのイガラシもだ！そして内野も外野もだ！」

青葉ナインが見た墨谷ナインは疲弊^{ひへい}しきっていた。

青葉部長「どうだ、やつらのすがたは？ たとえこの試合に勝ったとしてもあれじゃすでに全国大会出場は不可能なボロボロなチームになってしまってるじゃないか。やつらだってそんなことはしつたうえで戦っているはずだ。いまやあとのからだがどうなろうとこの試合だけは負けまいとな。いいか、よくきけ！ おまえたが全国大会のためなんてからだをかばって試合をしてるいじょう…、ああすて身になった墨谷には絶対に勝てるわけがないんだぞ。たとえこっちがボロボロになろうとどうなろうと、こっちもすて身で戦ってこい。」

「は…はいっ！」

青葉部長「さあ、いけ！」

ワンアウト一塁、三塁。イガラシは渾身の力を振りしぼって投げた。

「カキーン」

打球はショートゴロとなった。ショート高木から丸井、そして加藤とボールがわたりダブルプレーとなって青葉の攻撃を断ちきった。

青葉部長「ま…またやられた。」

そして、同点のままついに十八回をむかえたのであった。

5・8 死闘！ 十八回

回は十八回。イガラシが投球練習をはじめた。投げるボールには勢いはなく、ただ小室のミットめがけてかろうじて投げ込んでいた。

青葉部長「みる、あのタマを…。そろいもそろってあんなピッチャーから得点ができんとはな。」

青葉ナインは誰も口をきくものはいなかった。

青葉部長「くやしかったら青葉のメンツにかけて点をもぎとってきたらそうなんだっ！
青葉の底力でたたきつぶしてきたらどうなんだっ。え！」

青葉捕手「は…はいっ。」

イガラシが投じた初球はストライク。しかしそのタマにはやはり球威はなかった。バッターは二球目をねらいすましたようにバットを振った。しかしイガラシの投げたタマはカーブ、タイミングがあわずバットは空をきった。

「ストライクツー！」

青葉捕手「な…なんだい、まだ変化球をなげられるのかよ。」

中村「しぶといやろうだぜ…。」

三球目、イガラシは渾身の力でインコースに速球を投げ込んだ。

「ストライク、バッターアウト！」

青葉部長「なんなんだ、あいつは…。」

三球目のイガラシの速球を見て青葉部長は驚きの声をあげた。
ワンアウトとなったが、打順よく一番バッター中村が打席に立った。中村はイガラシの初球をフルスイングした。

「カキーン」

打球は快音を残してライト島田の頭上をおそった。島田が全力で背走した。最後、島田はジャンプしてフェンスにぶつかりながらもこのタマを好捕した。

「がんばれよーっ」「ツーアウトだぞー」「あとひとりだぞー」

応援席から墨谷ナインを応援する声が墨谷ナインに届いた。

ツーアウトとなった。次の打者は初球をファーストゴロにしてしまう。ファースト加藤が前進してきて、ベースカバーに入ったイガラシに送球した。その時だった。カバーに入ったイガラシの足がもつれて打ったバッターと激突してしまったのであった。

丸井「イガラシ！ どうしたイガラシ！」

イガラシ「だ…だいじょうぶ。は…走って…いきが…。」

加藤「いま肩を打ったようだけど…なんともないか？」

イガラシ「そんなに…かたんにいかれる肩、してないよ。へへ…、そんなことよりはやいとこ終わらしちゃいましょうや…。」

もう限界をとうに超えているイガラシだったが、最後まで意地を張り通した。イガラシがマウンドに向かっていている時だった。外野線審の声が響いた。

「タイム！」

外野線審は倒れ込んでしまったライトを守る島田に声をかけた。

球審「きみ、どうした。」

島田「あ…。いけね、ちよつとめまいがするなとおもったら…。」

球審「さっき、頭を打ったからじゃないのかね？」

島田「い…いや、ぼくこんなことしよっちゅうなんすから。な…なあ。」

遠藤「そ…そうよくやるんですよ。」

高木「うん…。」

球審「もう交代する選手がいらないからって、あまりムリしないようにね。」

島田「はい。」

丸井「ほんとうに、だいじょうぶなんだろうな。」

島田「だ…だいじょうぶですよ。」

丸井「どうせあとひとりなんだから、おまえはつつたつてりゃいいからな。」

島田「はい。」

先ほどフェンスに激突した痛みと合わせて、身体の疲労は島田も限界を超えていた。

青葉部長「さ、ねらいはわかつとるな！」

青葉三塁「はい。」

青葉部長はライトを見ながら次のバッターに指示をした。

バッターボックスに立ったバッターは左足を大きく前に出し、あきらかなライトねらいのバツティングフォームでかまえた。イガラシはこれに気づいてインコースをねらって投げたが、そのタマには勢いがなく、コースも甘く入ってきた。

「カキーン」

快音を残してボールはライトをおそった。島田は最後の力を振りしぼりこのタマをおう。最後は後ろ向きに出したグラブに打球が入った。

「スリーアウト、チェンジ」

センター遠藤が島田のもとにかけよった。

遠藤「よくやったぞ島田。さ、つかまるんだ。」

島田に肩をかした遠藤だったが途中で二人ともころんでしまった。マウンド上ではイガラシが精も根も尽き果てたのかのようにしゃがみこんでしまった。

丸井「ほら、たたねえか！　こんなときこそ強がってみせるもんだ。」

「よくやったぞー、墨谷ー。」

応援席からも健闘をたたえる大きな声が降りそそがれた。ナイン全員ベンチに戻ると倒れるように横になった。そう猛暑と十八回という長い戦いに精も根も尽き果ててしまったのであった。

丸井「すまんみんな…ほんとうによくやってくれた。ありがとう！　おれたち…

青葉に勝つことができなかったも、負けなかったんだからな！」

島田「キャ、キャプテン…まだおれたちの攻撃がのこってるんですよ！」

高木「そ…そうとも。」

丸井「いいんだよ、もう強がりはいうな。どいつもこいつも、バットをふる力どころかつたてることすらやっとなっていうのによ！」

あまりにもインターバルが長かったため球審が墨谷ベンチにまでかけよってきた。

球審「バッターはどうしたのかね？」

加藤「あ…おれだ。」

丸井「さあおきろ！　バッターボックスにたってりゃいいんだからな。」

加藤「は…はい。」

丸井「休ませてやりてえのはやまやまだが、棄権だけはしたくねえからな。」

加藤「わ…わかってます。」

自分の打席ということも忘れて横になっていた加藤だったが、起きあがってバッターボックスに向かった。加藤も疲れていた。簡単にツーストライクに追いこまれたが、三球目をフルスイングした。しかしバットは空を切った。

「ストライクバッターアウト！」

加藤は最後の力をふりしぼってスイングしたためその場に倒れこんでしまった。

球審「きみ、だいじょうぶかね。」

加藤「す…すみません。」

丸井「バカヤローッ。つたってりゃいいのをムリしやがって！」

丸井の肩を借りながら加藤はベンチに戻っていった。

「いいぞ加藤！」「よくやったぞー！」

応援席からは加藤をほめたたえる声があがった。

丸井「さあ、もうねていいんだからな。さあつぎいってこい！」

加藤をベンチに寝かせた丸井は次打者に声をかけたつもりだったが、次は自分の打席だった。丸井は必死だった。今までの自分を振り返りながら、最後の打席に集中した。初球を空振りした。思わずバランスをくずして倒れ込んでしまった。キャプテンとしてみんなのために自分ができることはなんなのか探っていた。青葉のピッチャーが二球目を投げた。

「カキッ！」

ジャストミートこそしなかったが打球は三塁とショートの間にくらった。ショートが懸命にグラブをのぼすが、打球はそのグラブをはじいてレフト前にこがった。打った丸井は精一杯走った。青葉レフトがまともに走れない丸井を見てファーストにボールを返球した。

「セ…セーフ」

「いいぞ丸井ーっ！」

墨谷応援席からは声が飛んだ。

島田「イ…、イガラシ、おまえだぞ。」
イガラシ「つたつてりゃいいっていったくせに…。こくなキャプテンだぜ…。」

イガラシは一度もバットを振らずに打席に立った。ファーストベース上でリードを取ることができない丸井をみてイガラシは決意した。「こうなったら、一発にかけるしかない。キャプテンを…走らせるか歩かせるかのな！」イガラシは長打をねらって大振りした。

「チッ」

「ファール」

ボールはバットをかすめてバックネットに当たった。イガラシは倒れこんでしまった。息をきらせながら立ちあがった。

二球目：

インコースにきた速球をイガラシはフルスイングした。

「カーン」

打球は快音を残してレフトにあがった。青葉レフトがバックしてこの打球を追ったが、打球は大きい弧をえがいてレフトスタンドにすいこまれていった。

丸井「や…やりやがった。」

イガラシ「へへ…、ほんとに…はいっちまったぜ。」

打ったイガラシはファーストに向かって歩きはじめたが、すぐに倒れこんでしまった。

青葉部長「ボサツとみてないで手をかしてやらんか！」

青葉捕手「お、おい、しっかりしろ。さあおれの肩につかまれ。」

イガラシ「す…すまねえな。」

丸井が歩きはじめ、そして打ったイガラシもなんとかベースを一周した。

墨谷二中応援席から拍手が鳴り響いた。そして青葉学院応援席からも…。

これが丸井にとってキャプテン生活最後の試合になったのである。

この試合で全国大会出場をきめたものの、傷つきすべての戦力を失い、棄権せざるをえなかったのであった。

